



孫樓喜持壽家

前編

五

88
13
1.479
5



あれが。この夜の木更のうらともの大町は宿投て宿のある小管領屋布の
 事かうと尋る序ふ彼は内中を神原といふ人ありと云ふ。さういふと、
 あつた小藤さういふ。あれは月毎お彼は内へ高物とすわらさるべ。その方
 ぶぬの甲こそとてあつたといふ。問せり。神原主の殿の所ころを
 かけぬる。小糸といふ弱女を奪ん為小家刀自背棋と破殺。件乃
 女子とりに攫ひ逐電して往方志とて又彼人の夢々矢所平ぬい去其の
 秋五十四歳といふ人を召せよとてさかん使うけり。つて。侍勢の安濃へ文加り。
 反命をせうとてといふ。秋暮冬ゆまごうふたるおろ。卒四塚終ふ
 高きざれの殿の遣責大やあつた。おひ問て矢所平ぬい十二月廿八日小肚
 心切て死ぬひき。その日その時七里の濱へ遠くよりくる破社の板子。う。
 彼卒四塚の女界のうともいぬ。九月十七日遠江灘ふと入水とて書言はして

ありしう。その彼人けふまごも。あつた。さういふとてさういふと。殿もさういふと
 驚きともひら早くて肚を切りし矢所平ぬいを殺すもの。惜むりのもの。又
 多う。つて。矢所平ぬい。卒四の思果て出せ。その夜さう。さう。正さう。
 まい。それ。その罪のとも怪ら。骨相書をりて。彼此を索さ。あつた。
 かく。珍夏のゆへ。後ある人。あつた。と。虚くと。彼人を。あつた。あつた。
 連係せられて。後悔を。こふ。なら。あつた。あつた。あつた。あつた。
 の。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 堰あつた。寒の胸の。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 抱き縮めて。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 人の。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 膳。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

ひめい 命と勇の枉死。あれがふりとも悲しむ。考ふれば、狭五郎ぬ。ひさりの
 親の忌明けの人を殺す。刺主君の懸想もひ。弱女をおとさる。
 と。世よ。夢のさるる。いと浅す。たふ為あら。親のあせ。夫と
 ろ。い。妬。い。憎。い。も。恨。む。せ。ね。ど。今。更。小。身。の。る。る。は。此。程。の。碎。く
 底。不。沈。も。あ。ら。う。く。小。の。歎。さ。せ。せ。ひ。た。女。子。の。旅。寝。の。道。さ。ら
 殃。危。の。か。ら。ん。為。小。黒。髪。を。赤。中。と。も。草。枕。結。ぬ。髪。の。を。や。ん。て。
 只。一。夜。の。あ。ひ。も。せ。と。ん。も。せ。ぬ。夫。不。棄。れ。て。尼。不。あ。ら。ぶ。と。祥。あ。り。ひ。ひ。い
 実。不。運。運。の。衣。小。容。を。更。と。て。小。身。子。は。な。う。て。の。ら。と。涙。と。あ。の。ふ。ん。り
 口。號。歎。の。ら。び。べ。つ。も。こ。と。木。嬰。も。鼻。う。ち。の。ら。う。と。も。と。ひ。ひ。と。れ。
 親。の。枉。死。小。夫。の。逐。電。進。退。不。究。り。て。佛。の。道。へ。入。ん。と。い。ひ。ひ。ひ。ひ
 理。あ。れ。ど。も。二。十。小。足。と。ぬ。身。中。あ。る。紙。一。旦。の。哀。傷。は。捨。ぐ。た。世。を。控。て。

後小夫小環會とあぶらぐせん且く出家をあらひひとせり。る。母。の。か。ら
 返。留。り。て。ま。づ。う。小。夫。の。往。方。を。索。祿。そ。の。先。途。を。ん。定。め。て。小。操。を。せ。く。後。小
 尼。小。あ。る。と。も。遅。は。よ。あ。ら。ぶ。と。の。ま。な。歎。さ。め。ひ。と。と。言。は。れ。て。耐。え。り。
 け。と。暮。一。翌。と。あ。せ。と。大。惣。の。涙。目。あ。り。て。袂。の。乾。く。い。と。ま。ひ。は。し。と。と
 と。ひ。か。れ。推。く。て。別。ま。す。る。母。親。あ。り。妹。あ。り。齋。齋。陣。羽。織。と。管。領。へ。進。じ
 る。べ。藤。倉。の。由。り。て。口。身。を。か。と。も。や。も。一。期。さ。さ。い。ま。の。べ。け。れ。ど。神。原
 氏。は。對。面。せ。し。入。り。進。下。と。ま。る。と。又。の。令。せ。と。あ。れ。が。現。木。嬰。女。尼。乃
 練。小。從。ひ。狭。五。郎。ぬ。の。往。方。を。索。祿。を。操。を。も。ま。じ。つ。夫。の。竟。さ。身。の。非。を
 改。め。夫。婦。ひ。つ。つ。あ。る。は。あ。ら。月。日。の。下。小。住。む。ひ。あ。れ。又。も。か。祿。を。ひ
 かる。へ。び。ひ。の。し。び。ふ。こ。を。尼。小。あ。る。く。六。十。餘。國。を。編。歴。一。母。と。妹。の。所。在。を。あ。ら。ん
 あ。ら。う。り。く。と。か。や。く。ふ。と。ひ。決。め。て。是。より。毎。日。又。繼。小。出。て。世。の。風。声。を

牙を遣はる所あり。これよむべきは。尼元来武義ある。豊島郡芝崎の
 道場より程遠くぬ布町二の寺あり。その名の向丸一八といふ人の妻あり。その比
 名を武とゆき。男見ひきり産した。ある小良人一八の商人を買入まふ
 春秋毎小末の節にて六條の妓院ある。姪女をさら惑され世に業を外はて
 家とてつる。其後郷の風吹小野が陰言吹く。おぼろむ志のびいふ言を以て
 練へる。良人いさうら腹ぞ。つ子綱五郎が七才の春屋より離別せられ
 二親の世を去りて。胞兄もあく親族も果敢く。したる。縁は天と雁の
 侶。後と搦換の枝小離。とて。この小廣は武野の。この身ひきをもち
 ぬ。い。まは姪女もまう。と入もいられ。又姉と限り。おぼろむを授
 へや。と。い。ひ。ぬ。み。田。川。ま。い。ゆ。れ。が。忽。地。ま。い。ひ。下。て。芝。崎。道。場。へ。ま。り。入。り
 願誓を誓て。度牒を乞て。秩父坂東残る。祝者井を巡礼。更又西國を

ろら巡りて。三熊野の瀧に煩悩の垢を洗ひる。加田の浦曲に宿投。折櫻
 禪尼に値偶せし。世もくお後をて。つ子のま。い。ひ。絶。今。往。生。乃
 素懐を還る。禪尼の教化するもの。そのお吾儕が近江路。且く旅を味ある
 ころ。華洛に情死の風吹あり。浅き。た。る。一。八。の。件。の。姪。女。も。あ。り。昔。又。賀。茂。河。不
 投。て。度。又。竹。の。ま。い。ひ。彼。人。の。為。流。經。て。佛。を。憑。き。ま。る。も。そ。や。十。あ。り
 八とせふ。あ。り。ぬ。お。れ。つ。子。綱。五。郎。も。今。茲。に。北。四。や。あ。り。けん。下。ま。び。浮。世。を
 脱して。舊里のつづみのうへ。絶て。あ。り。は。し。り。と。い。ども。一。八。の。ま。い。ひ。あ。り。よ。り。や
 その子に稚くとも。御あつ。る。坊。買。る。れ。ば。化。郷。へ。移。轉。さ。う。も。あ。り。づ。つ。あ。れ
 後。の。豊。島。の。あ。り。糸。屋。へ。い。り。て。牙。を。寓。め。良。人。は。離。別。せ。れ。て。も。綱。五。郎。が
 母。の。尼。に。縁。あ。り。の。と。名。吉。の。つ。い。で。強。面。り。て。あ。り。と。さ。紹。奴。の。登。据。あ。れ
 ぶ。陀。袋。の。底。を。撈。ら。ぬ。綱。五。郎。が。臍。帶。と。芝。崎。寺。の。度。牒。あ。り。吾。儕。が。俗。性



系引元美平氏



目ぐるぐる。臂を伸くと引直すと吐嗟と騒ぐ胸を揉めて徐々うんうんつ。
ころめびあゝと収ませ。いかに行興を借りのるべし。里もてや道
うろと放さむや。と身を及る。弱気とせむと女子の身ひらう。鬼ふらう。持
と膝ひらう。齒落すものど困果る形勢ふらう。男の冷笑的の妙はよく
罵りものる。行興昇てせむるもの。ふねがけが暮さんと候興の微八と
略して東海道と股す。一度も缺る建場酒女子ひらう。小碎を指を
衝くはして棒組とふいひりたる。いかに行李もあびらう。紙包を衣
ふく胸の物を掛る。可惜女子の直がらう。行興よきと負れらう。
その行李と遠く。行興うらうと。その隙に逃れとせむ。もろと。
うん廻て引よさる。行杖のゆひり解て。此被撲地と倒る。扱は微八が
紙包を空する。扱揚且。違ある。の叢中へ落ちて所在のまればとありぬ。

喃をいふ。身も命も。ゆえぐ。た物づく返して。と。い。つ。世。も。あ。ん。ど。大。總。が
腕揉あびて。ま。る。不。行。興。へ。う。ら。入。且。握。ん。と。ま。れ。と。身。ひ。ら。う。で。八。尾。居。は
握と。引と。え。れ。面。と。ま。ら。う。め。や。と。ま。と。う。け。又。握。ん。と。ま。ら。う。向。大。總。と。ま。ら。う。
腹も。後。方。の。り。も。ま。ら。う。て。力。を。究。て。空。行。興。を。揚。且。忽。地。う。ら。俯。お。
倒。し。て。い。く。損。傷。る。額。を。接。て。唾。を。塗。著。強。面。と。君。よ。い。ら。る。ん。ば。か。く。ち。で
骨を。お。ら。と。と。ど。逃。ま。く。と。身。を。起。彼。首。を。首。へ。追。蒐。る。浩。知。よ。年。の。数。四。十。あ。ま。う
の。一。個。の。市。入。道。場。う。ら。賽。途。の。ま。ら。う。て。あ。る。程。は。微。八。の。大。總。を。追。え。と。て。そ。れ
と。ま。ら。う。巨。年。を。い。は。れ。彼。市。人。を。抱。き。首。と。つ。警。と。て。眼。を。睜。く。と。い。何。と。ま。
と。衝。花。と。扱。は。微。八。を。仰。さ。る。筋。斗。を。打。て。輾。轉。び。ま。ら。う。記。由。ら。う
けり。大。總。へ。え。ら。う。と。ど。人。の。た。と。け。息。つ。た。あ。ん。ど。襟。う。ら。う。し。何。処。の。誰。と。ま。
ま。ら。う。と。けん。ど。難。義。を。救。ひ。も。と。と。さ。び。言。ひ。ま。ら。う。場。一。か。じ。故。あ。く。と。縁。會。ら。う。

不町の糸屋へゆくものぞ。其知まで送らぬるべ。この人の幸あんと。とて人を
 市人うち点び不町の糸屋でしづみよ抑むん身へつるる人ぞ妹旦開
 由縁の入る今の主人は福あり人。ゆくりの綱五郎が後見をよる十兵衛
 る。そのゆゆい主従あれど叔婦旦開が見られ鳴呼かほても扱を呼ばれて
 ろうね隨の締括り。けの半月の雨を突編て道場の阿弥陀徑午部よめて賽
 吾儕よめて悪棍は指でもさくさくあせむと親切は向慰はも
 憑りた小又姪あれどあねが佛大徳の額は中拜も。そのは毫も救やひふ
 糸屋は由縁あるけ且ど去年の秋より故ありて庇を受る尻前前の俗名に
 ち或とあらん舊のあど一八ぬら。離別せられて尻はあり。紀伊州は年を
 得てその春東國へ立ちて。鎌倉のてなつるる。し百骨のてあつ。この十兵衛
 うら教習は原未その名を傳。安綱五郎が実母の尻に物情へ家を思愛の

鬻を断。ちまぐ東のありあつ。息の内を信せむ。と舶へ往主の素懐を
 る。遂もじつ。といふ回よ身を起せ。徹八も息杖をたてて十兵衛を打んと
 とんば身をひらじ。衝として息杖を奪ひ取り。続々打悩む。徹八は首を
 搦りた。ゆもせと。愛を合し。一反あまりきつる。急死よとてあ。空竹輿を
 引肩被足ふ信と。逃去りたり。十兵衛はる角怒も堪も。杖を揮て追へと
 とんば大徳の袂を引と。早りもり。過失ありん。逃べそ。さ。外。もの。ひ
 かみも庇覆めて。後中て。ありぬき。と。鼻小件の悪棍が。紗袂をひ。本で叢中へ
 投入し。車。秘。影。の。おも。けり。といひ。十兵衛。杖。を。操。を。あ。あ。ひ
 か。ち。是。首。中。あ。ん。彼。首。お。欬。と。身。丈。より。あ。ま。る。夏。草。を。う。た。た。て。索。れ。ば
 日の没果て入相の。積ううくと。音と。そ。十兵衛。後。方。を。見。う。へ。り。て。田。夜。音
 る。ふ。あ。ん。身。と。ま。の。ふ。この叢中を徘徊せ。彼。る。あ。れ。その。歌。又。編。て。人の。批評。も



新撰春史音義卷五



新撰春史音義卷五

三

新獲し一圓不町へ立ち上り。吾儕のあまびこ来て索るよも夜の中へ入るまを
 三のあどじとのひつぐ杖をふる道次よか立つ。紙裂りけて標干。獲ものへと
 いそぐせんの大徳の遺恨けしむも。否とのりもまもる。十兵衛は誘引し不町の
 切へ赴き入り。却説二月の月をりて草は集鳴虫の声。熊馬追替促織よ
 鉦敵道場は勤行の木魚の音ものと澄て人跡絶する時分を窺ひ行紙を
 取らんとて未戻しる悪提微八前面より来る十兵衛が挑燈をかりるこ
 さんとて且く草小懸き入り。六あまびこして十兵衛の立る杖をかあてし。
 挑燈を引提つ。草をひたし入る。獲よ忽地火ふる夏虫の羽風は挑燈うち
 滅さん。あまびこ。と嘘ひつ。彼此とら探まび。微八も徐は探り寄り。兩人肩一
 紙色を掲り當て莞尔と。是方へ引ば彼方へ引ば此彼共は驚きして草踏
 めし身を起し。送る争ふ如法夜は響が掛ひ掛へつひ入り。揚る巻の回や。

草原を露の玉掃目解一袂の内より為る陣羽織とてれを奪ふんと双方
 入り。競て走ももの下より獲る草をえりて。隙を窺ふ半响黒平。左右へ
 丁と突進し巻ふ響きとて十兵衛微八の忽地は阿と叫びつ。倒れんとく足
 踏固り。さそへと透るむれど身夜とてもの各中あみ現野干玉の悪平と
 陣羽織とてや極どろく透るむれど身夜とてもの各中あみ現野干玉の悪平と

他者云半响黒平へ曩は姨背棋は鎌倉の宿所を逐ま今も武蔵子
 あるよ。ハ祥は第五巻小書り。巻より下綱五郎が流使伍平太か
 残毒大徳小系狭五郎ホガ再傳を仔細に述婦幻の得意ハ
 如何五の巻より下よあまん致。

糸櫻春蝶奇縁卷之五終

この冊子ハ八卷を全本トシ九月節後ニ稿を起シ初冬下旬ニ業を卒
 せしむるも又匠人全ク功を成の日遠くまでとらふとも書肆ハる月後
 是の時節後を嫌とてより今更ニ釐て四卷を度取リ残缺四卷ハ
 年内ニ續て刊せんとすべく編左ノその意を述大凡一編越向の巨擘ハ
 礫川の段あり。他者の用をこま勸懲を肯とく。とて局と結ぐ。其四方の
 看管前後の編と披閱と高評とをまきまへり。

- 第五 芝崎の段
 - 第六 圓塚の段
 - 第七 不町の段
 - 第八 礫川の段
- 右残缺四卷陸続刊しとて全本と刊布の旨遠くはるく詳述せり。

書 林

京都寺町通佛光寺	河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目	須原屋茂兵衛
同 貳丁目	山城屋佐兵衛
同 貳丁目	須原屋新兵衛
同 南傳馬町壹丁目	山城屋政吉
同 下谷御成道	英藏
同 大傳馬町貳丁目	丁子屋平兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
同 司	和泉屋吉兵衛
大阪心齋橋筋本町角	河内屋藤兵衛
大阪心齋橋筋博労町角	河内屋茂兵衛板

